



経済学PhD留学について（〈特集〉大学院で経済学を学ぶ）

山崎，潤一

(Citation)

國民經濟雜誌, 221(1):61-67

(Issue Date)

2020-01-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041959>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041959>



国民経済雑誌

経済学 PhD 留学について

山 崎 潤 一

国民経済雑誌 第221巻 第1号 抜刷

2020年1月

神戸大学経済経営学会

経済学 PhD 留学について

山 崎 潤 一^a

1 はじめに

経済学の大学院は、学部レベルでは培えない専門的な技能を学生が主体的に学習し、実践していく場所です。勿論学部で卒業して企業や官庁に就職しそこで学ぶ事も沢山あります。しかし、学部卒で入った会社であなたが学びたいことを学ぶ環境が提供される保証はありませんし、会社としては会社の利益よりも個人や社会に還元されるタイプのスキルに十分に投資するかは甚だ疑問です。勿論大学院で学んだ専門的な技能が一生使える保証もまたありませんが、必要なときに必要な専門的な事柄を調べ勉強したりする基礎的な学力、また現実を整理し直面している問題をあぶり出す知的フレームワークの取得に関しては、大学院での修学で得られるものは多いと思います。博士まで習得することが出来れば、これらに加えて新しい問題を定義しそれを解決する技能、またそれを人に分かりやすく伝える技能も身につくはずです。これは選んだ専門分野に関わらず、あなたが主体的に何かを知りたい、社会を変えたいと思うのであれば、非常に汎用性がある技能です。また、近年データサイエンスの流行に代表されるように、経済学の実践や経済学者の活躍の範囲が広がっているように思います。なので、私は経済学大学院に進んで勉強や研究をすることは、エキサイティングなことだと思っています。

さて、もしあなたが仮に少しでも大学院に興味を持ったとすると、あなたは「修士で卒業するべきかもしくは博士まで行くべきか、またどこの大学院に行くべきなのか」ということを次に考えるでしょう。しかしながら、特に博士に関しては情報があまり多いわけではありません。そこでここでは、ある意味一番極端な例として、海外留学による博士号取得とそのキャリアパスを紹介したいと思います。最初に断っておきますが、何もそれが唯一のキャリアパスだというわけではありません。博士を取らずに修士を取った後に就職する人もいれば、国内の大学院で博士号を取る人もいると思います。ただ、こういうキャリアパスもあり得る

a 神戸大学大学院経済学研究科, yamasaki@econ.kobe-u.ac.jp

ということを考慮しておく、色々な可能性が見えてくると思います。

2 留学の先にあるもの

とはいっても、そもそも留学というキャリアパスに具体的なイメージがつかめないかもしれません。日本人が経済学で博士号を取るために留学する場合、典型的なケースは修士まで日本の大学院で基礎的な経済学のトレーニングを積み、海外の5-6年の博士号コースに進むというものです。博士号コースの最後には、博士論文の執筆が勿論あるわけですが、同時に就職活動が待っています。就職活動では、自分の最も良い論文（Job Market Paper＝就職市場論文）を広告塔にして、世界中の大学などに100校ほど応募をします。その中で自分に興味を持ってくれた大学などから連絡が来て、世界中の大学と就職活動中の学生が集まるアメリカの経済学会で行われる面接（ここでおおよそ10-15に絞られます）をし、その後大学での研究発表が行われ、そこで感触が良かったら大学側から契約のオファーが来ます。勿論人によってはそこで大学を選ばず、IMFや世界銀行といった国際機関の職員や、中央銀行や民間研究所の研究ユニットの研究員、コンサルタントになる人もいますが、平均的な英語のレベルがあまり高いとは言えない日本人学生の場合、現地でそのまま研究とは離れた業界に就職する人は少ないように思うので、たいていの場合大学やそれに準ずる研究機関や国際機関などに就職することになると思います。ただ、最近ではAmazonやGoogle、FacebookやUberといったtech企業からのオファーを受ける、計量経済学やミクロ経済学を専門とする学生もいるようです。まだ日本人学生でそういった企業に就職した例は私はあまり聞いたことはありませんが、2017年に実証産業組織論の中堅の一流研究者である渡辺安虎先生がアマゾンジャパンに香港科技大から移られたのが記憶に新しいです（ちなみに渡辺先生は先日東大に移籍されました）。

ちなみにですが、海外の有力な経済学博士号プログラムは基本的には卒業生がどこに就職したのか全て公開しているはずです（たとえばharvard economics 2017 job market candidates placementと検索すれば出てくると思います）。それを見れば、そのプログラムの（短期的な）パフォーマンスが分かり、自分がもしそこに留学をしたらどういうキャリアパスが想定できるか分かる、という事になります。また、就職活動の全体像は、アメリカ経済学会のwebsiteに詳細なレポートがありますので、見てみることをおすすめします（<https://www.aeaweb.org/resources/students/grad-prep/job-market>）。例えばその資料には、最もタイプの良い契約であるテニュアトラック契約（6-7年契約で、契約の終わりに審査があり、終身契約になるかどうか分かる）をアメリカの大学から得られた場合、最初の給料の平均が128125ドル（およそ1400万円）だという数字があります（リンク先の”Survey of the Labor Market for New Ph.D. Hires in Economics.”参照）。日本ではそこまで大学教授の初

任給は高くありませんし、アメリカの生活には何かとお金がかかるので単純な比較は難しいですが、そのあたりを調整してもアメリカのトップ大の初任給の方が給料水準が1.5倍は高い印象を持っています。また求人広告や出願はアメリカ経済学会のJOE (Job Opening for Economists) を通じてネット上で行うものなのですが、色々な大学や会社が求人を出しており、無料で見ることが出来るので、検索してみると面白いと思います (<https://www.aeaweb.org/joe/listings?>)。今Aから始まるリストをパッと見ると Airbnb や Amazon といったお馴染みの企業を見つける事が出来ました。ちなみにですが、国際機関などで活躍しようとする博士号が重要だという事はよく言われることです。実際 IMF や世界銀行など経済系の皆さんが興味を持ちうる国際機関は、このJOEにも求人を出しており、博士号が必須となっています。

素朴な疑問として、日本の大学院で博士号を取ってアメリカでの就職活動に参加出来ないのか？という事が浮かぶと思います。それは理論上不可能ではないとは思いますが、実際かなりのハンディキャップがあります。出願自体は出来るのですが、例えば東大から出願をしてアメリカに就職したケースが過去にほとんどないので、採用側としても「この大学から学生を取って大丈夫なのか？」と不安があるわけです。より競争的な環境、高給、また海外生活などを夢見てアメリカやイギリス、また香港やシンガポールなどで就職したいと思うのであれば、留学することでそのチャンスは広がるでしょう。

また逆に留学をすると日本での就職活動はどうなるのか？という疑問も出てくると思います。日本では、個別の大学が公募情報をJREC-IN (これは経済学に限らずいろんな分野の求人サイトです) というサイトに載せることが多いですが、アメリカ経済学会に諸外国と同じように面接に来る大学もあります。いずれにせよ、海外にいるからといって日本の大学に就職できない、ということはないですし、留学していたことが日本の大学にプラスに評価されることもあります (英語でのティーチングアシスタント/授業経験など)。面接などで日本に戻るコスト、また日本にいないことでネットワークの機会を失うことはあるとは思いますが、夏休み等に積極的に日本の学会やワークショップなどで発表することでネットワークの機会が失われるコストは避けられるとは思いますが。

以上そうして考えてみると、海外の大学で博士号を取ることで可能性は広がる一方で、悪いことはないように思えます。しかし、世の中そんなに甘い事ばかりではないです。以下思いつく注意点を並べてみました。

まず私も含めてなのですが、人の話は注意深く聞くべきです。特に指導教官などの多くの研究者は、大学に残れているという意味で成功者です (必ずしも全ての博士が大学で働くことを望むとはいいいませんが、希望しても就けない人がいることも確かです)。成功者の言うことばかりを聞いていること、悪い方への想像や事前の対処が難しくなるかもしれません。

幸い、最も大事な就職活動に関しては上にあるような公の情報があり、全体像を捉え損ねることはないように思いますので、そうした客観的な情報を集めることと、誰が話しているのかを考慮すべきです（例えば英語ネイティブレベルの人の話と私の話はまた違うでしょう。私の英語力は日本人としては良い方かもしれませんが、経済学欧米 PhD を持っている人の中ではお世辞にも高いとは思えません）。

第二に、機会費用は大きいです。経済学博士での留学は最低5年、人によっては6-7年となり、大変長いです。修士を日本で取ってから留学をすると、終わる頃には30才前後になっているでしょう。この記事が出る頃には私は32才ですが、学部時代の同級生が一流企業で出世をしたり、車や家を買ったり、子供を育てていたりすると、ほんのちょっとですが、えも言われぬ気分になることを白状したいと思います。また学費も高いです。後述するように一流大学に合格するレベルの学生ならば授業料と生活費をカバーする分の奨学金が出るでしょうし、日本の民間財団や公的機関からの補助も出ることはありますが、あまりレベルの高くない大学だとそれらも得られずにそもそも資金繰りからして留学は難しいことがあります。いくら就職後高給取りになって預金通帳の桁が変わるかもしれないと言っても、お金がないと生活は辛いです。

第三に、海外生活は色々辛いことが多いです。特に英語に慣れない初期の頃は孤独を味わったり、指導教官などとうまくコミュニケーションが取れなかったりすることもあるでしょう。また学問上でのディスカッションには慣れても、公共料金の手続きや税金関係の調整などなど、色々な事務手続きを英語でやるのは中々冷や汗ものでした。勿論喉元過ぎればそうした苦労も笑い話ですが、ジワジワとダメージが来ることも確かです。また、留学最初の年にコアコースと呼ばれるミクロ・マクロ・計量経済学の授業を受けるのですが、それに失格すると退学だったりするので、ある意味就職活動と同等のストレスがありました。そうした試験をいろいろ突破して、もう人生でこれ以上試験を受けなくて良くなった日には、頭の中でファンファーレが鳴り響いたのを覚えています。一方で残念ながら試験に通らず退学になった友人達もいましたが、他の大学に転入するなどして今研究者として活躍している人もいます。なので、必ずしもコアコースの結果が全てではないのですが、かといって不要なストレス・トラブルは避けたいものです。

3 今から出来る準備

さて、仮に海外で博士号を取ろうと思った場合、恐らく最初の難関はそもそも留学先から合格をもらうことです。私は修士課程二年の時に欧米のおおよそ top 20 ぐらいの博士号プログラムへ出願したのですが、10-15ほどの大学院に出願して2つの大学院からしか合格をもらえませんでした。一方同級生で同じく出願をしていた某君は、アメリカのトップ校から

軒並み合格をもらっていました。さて、何が合格と不合格を決めるのでしょうか。

端的に言えば、あなたの修士課程の時の成績、とくにコアコースといった基礎的な科目の成績が示す、あなたの基礎的な学力の証明と、修士論文の執筆や普段の様子から見える研究者としての潜在能力を保証する推薦状、またその推薦状の信頼性があなたの合格を決めます。特に推薦状は上位の大学院に留学を希望するのであれば国際的に名の通った研究者の推薦状を得る必要があるでしょう（残念ながら私の推薦状ではダメだというわけです）。そういう意味では、修士から海外の有名な大学に留学をして、そこで推薦状を得る、という戦略をとる人も希ですが、います。また、推薦状は3通ほど求められる事が一般のため、指導教官だけではなく他の教官からも推薦してもらえるように、普段から研究の事などを相談することが必要です（ちなみにそういった人に相談するスキルは推薦状だけではなくその後も非常に重要になります）。

また当たり前ですが、英語の学習も大事です。昔はTOEFLで100点というのが基準でしたが、最近は競争が激しくなって110点を超えている学生も普通にいます。推薦状などに比べると重要性は少し落ちますが、最低100点、出来れば105-110点あたりを目指して頑張ってもらいたいです（自分が今受けると何点取れるのか知らずに言っていますが…）。また100点レベルで留学をすると、最初の数年は恐らく辛酸をなめる生活をするにあらと思います。実際私も最初の1年ちょっとは、自由な自己表現や知的なコミュニケーションをすることに苦労していました。指導教官とのミーティングも、最初の頃は互いの言っていることがほとんど通じていなかったのではと思うぐらいです。

それと地獄の沙汰も金次第、です。幸い優秀であればアメリカやイギリスの大学院は生活費も含めてお金を出してくれる合格オファーをくれるところが多いのですが（勿論返す必要はありませんよ）、そうではない大学院もあります。事前に授業料を払える証明があれば大学側は費用を負担しなくて良いので、合格を出しやすいという説があります。学費はおおよそ年間200-300万円ぐらいだと思うので、ほとんどの人は自分では払えない額だと思いますが、授業料全額と月額20万円ぐらいの支援をしてくれる日本の財団が結構あるので、そこに事前に申請して一つでもいいからもぎ取り、出願している大学に追加的に証明を送って合格率を高める戦略があります。実際私もその手段をとりつつ、奨学金が切れた6年目はそれまでに大学でティーチングアシスタントなどをして貯めたお金などで食いつないでいました（一学期分週60分の補習講義をしながら、年間50-60万円ぐらいもらっていたと思います）。ちなみにティーチングアシスタントは教育経験として履歴書に書けるので、やっておくべきだと思います。

これらの情報に関しては、日本から海外の博士号プログラムに出願する場合の事情は、経済学大学院留学ガイドというウェブサイト (<https://sites.google.com/site/econphdryugaku/>)

があり、非常にまとまった情報が得られます。興味があれば見てみることを勧めます。さしあたって学部生の皆さんは、英語と経済学をしっかり勉強したり、いい卒業論文を書いたりする事（＝教員からの研究者の卵としての評価を上げる）が肝要です。

4 私の個人的な経験

さて、ここまでは割と客観的に書いたつもりですが、ここからは私の個人的な経験を少しだけお伝えしたいと思います。

よく人に「結局留学して良かったかと思うか」と聞かれますが、私は「良かった」と文句なしに言えると思います。理由は三つあります。

一つは世界でもトップレベルの研究環境に身を置き、論文を叩かれつつも磨き、いくつかの大学から職のオファーをもらうなどした経験は、自分の「出来て当然と思うこと」のレベルを上げてくれた事だと思います。私の留学した London School of Economics はランキングで言う top 10、欧州に限れば経済学で一番の大学で、また私の専門の開発経済学では恐らく top 5 に入ると評価される大学でした。教授陣もスター研究者ばかり、同級生も皆優秀という環境で6年いたことは、決して優等生ではなかった私には緊張と苦勞の連続だったような気もしますが、就職活動をし終わった時に研究者としてようやくスタートラインに立った感覚を持ったのを覚えています。

また二つ目として、留学は投資や生産であると同時に、楽しむべき余暇でもあります。私は留学先がロンドンだったのですが、世界で最もコスモポリタンな都市にいたことは単純に楽しかったですし、今でも多くの同級生達と連絡を取り合ったり研究にコメントをしあったりして、交流を続けています。勿論留学先が都市になるのか田舎になるのかは出願の結果次第ですが、いずれにせよ異文化での生活から得られる刺激や発見などは、中々国内では得がたいものがあると思います。

三つ目は、いわゆるアニマルスピリットに関してです。よく親戚などに「留学までして勉強したいとか、よっぽど勉強好きだね」という類いの事を言われる事があります。この点誤解が多いと思うのですが、博士号を取るには勉強は必要ですがそれだけでは十分ではありません。何か新しい発見などをしないと良い論文は書けないので、多少のアニマルスピリットといいますが、「よく分からんけど、とりあえず誰もやってないからやってみよう」的な精神のようなものが研究には必要だと思います。この点昔は私も気が弱かった部分があるのですが、留学中に追い詰められて何とか最初の一步を踏み出すことが出来た、それによって一步を踏み出すことが軽くなったような気がしています。

5 さ い ご に

どんなキャリアパスを選ぶにしろ、決めた以上は頑張って人生をエンジョイして欲しいわけですが、事前にその道をしらなかったから出来なかった、というのは避けたいものです。ここにあげたリンクなどから、こういうキャリアパスもあるんだよ、ということを知ってもらえれば、たとえあなたがそれを選ばなくても、この記事の価値があったと思います。とりあえず調べいろんな情報を得て、自分の希望と照らし合わせて決めることをおすすめします。